

# 汲古一心

## 『玩物喪志』(二)

中村素堂

一昨年、ある女子高校で北原白秋の文学展を催して、白秋の郷里九州の方から歌の半折の軸を借りたところ、これが偽物であった。ちよつと気の毒なことをいわなくてはならないようになったことがあった。これなどは白秋と親しかった人から買ったものだからだ。だから、随分罪の深いことをする人もあるものではないかと思つた。

まだ十年ほど前には存世された人のものでさえこれなのだから、少し遠い時代のもので世人に好かれるものとなつたら、これは偽物のあるのが当然なわけで、いやな話である。かなり遠い所では藤原定家のものなど最も贋作が多く流布されている。近世では太田垣蓮月尼は、筆蹟がすぐれていたせいか、たびたび偽物に出逢うことがある。

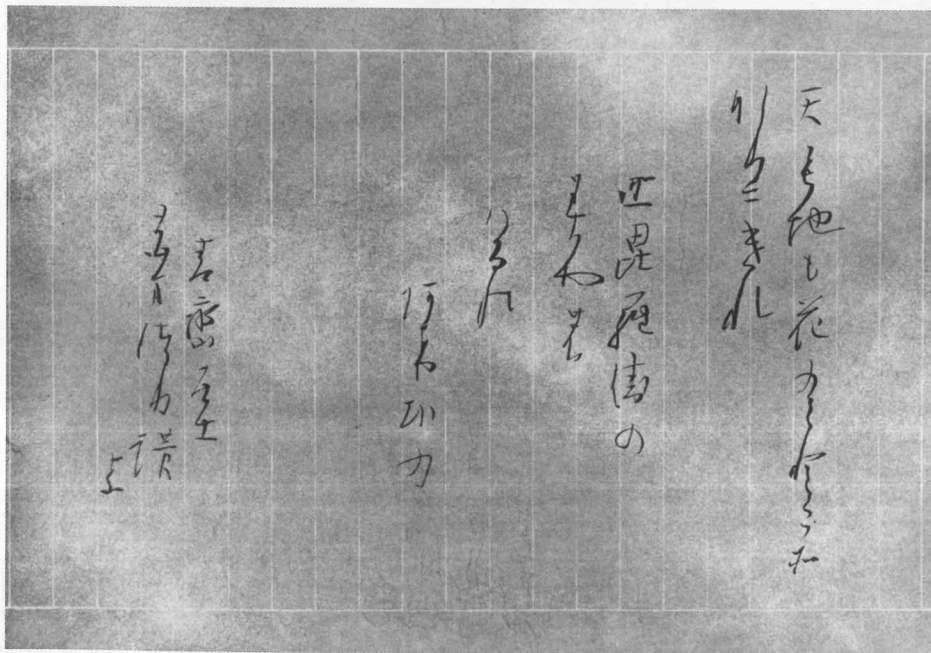
しかしこの反対に美事な作品で、しかもかねて敬慕して措かない人の作品などに遭遇した時の喜びは、まあ恋人を手に入れたようなもので、藤原鎌足が安見子をめとつた時の喜びにも匹敵するといいたいくらいである。

いつか神田の古書店で、会津八一先生の奈良の名歌に先生得意の百万塔を描いた小軸を見つけた時など、用事を省略して早めに帰宅して眺めたほど、子供が新しい玩具をもらったのと何ら拵ぶところはない。中学の教科書に石川雅望すなわち狂歌師の大宗宿屋の飯盛の名歌、「歌よみは下手こそよけれ天地が動き出してたまるものは」という古今の序をひやかした歌があつて、子供心におもしろがつたのを、後年これも神田で本人の書いた真蹟に出逢つたことがある。こんな話はまだまだいくつもある。けれども、牧水の酒の歌、旅の歌、晶子のやわ肌を歌、柴舟の野火の歌、若草山の歌、歌よみは歌よみで歌人のものを、詩人は名詩のものを、俳人は名句の真蹟をと、みな胸をワクワクさせながら探しているようである。

時々しみじみと反省するのであるが、仮名文字の美しい発達は実に短歌があつたがために発達したので、短歌につながる仮名文字の美は切つても切れないものである。これに執着してその美しい線に見惚れているうちに、読むための歌がいつの間にか書くにふさわし

い歌をと心がけるようになって、書けそうもない歌はなるべく作らないようになっていのではないかと気づいた。これは実に愚かしい顛倒で、いかにも陥りそうなのもある。尚書の名言「玩物喪志」という戒めを今さら感嘆するけれど、チト遅すぎたようである。

〔たかむら〕 昭和三十五年一月



天も地も花のみとこそなりにつれ  
迦毘羅衛のみやはるのあけほの  
(大内青巒) 昭和四十七年